

Title	ベーダ「イギリス教会史」：長友栄三郎訳
Sub Title	A critical note on the translation of Bede's 'Ecclesiastical history of England'
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.3 (1965. 12) ,p.117(417)- 120(420)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19651200-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

ベーダ「イギリス教会史」

長友栄三郎訳
昭和四十年創文社刊

坂 口 昂 吉

七世紀から八世紀にかけてのアングロサクソン諸修道院の文化はユスチニアヌス時代とカロリング朝ルネサンスの間の文化的断絶に橋渡しをするものといわれている。それはアイルランド系諸修道院からの影響もつけたが、主として教皇大グレゴリオの指導の下、アウグスチヌスを中心とするベネディクト会の布教運動に起源をもちウエアマウス及びジャロウの修院長ベネディクト・ビスコップ、ケオルフリッドらを中心として形成されたものである。

先般、宮崎大学教授、長友栄三郎氏が訳出された *Venerabilis Baeda, Historia ecclesiastica gentis Anglorum* は、その古典的教養の深さと文章の優雅さにおいてこの修道院文化の頂点を示すものであると同時に、英国におけるクリスト教文化形成の過程を記録した貴重な史料としても著名である。英国史、教会史、文化史等の分野において学術的に重要であるばかりでなく、大グレゴリオとイングラントの少年の出会い、オズワルドとエイダンの友情、詩人カイドモンというような美しい逸話で飾られている忘れ難い書物である。

本訳書の底本は Charles Plummer の *Baedae Opera historica* (Oxford 1896) であり、Loeb 版が参照されているところ。訳者は序文においてつとめて直訳を旨としたとべている。そして実際、ラテン原文の字義を忠実に追っている跡がみられる。しかし原文への忠実さも度を越して、理解しにくいような表現がしばしばみられるのは残念である。いまテキストの序文だけについてみると、「作者」(四頁一行)は「典拠」もしくは「証人たち」と訳すべきであろう。「聖なる記憶の大司教テオドルス」(四ノ四)は「尊むべき大司教テオドルス」が適当である。「意に留められるべきことの中で、最も聖なる教父であり司教でありますクスベルトにつきましては、この書物の中でも、また彼の行動についてわたしが書きました小論の中でも述べましたが、それは一部分はリンディスファーン教会の同僚によつて以前に書かれたことから知りまして、わたしが読んだ歴史についての信頼に適應するように単に付け加えたものであり、また一部分は、誠実な人たちの最も確実な証言によりましてわたし自身知り得ましたことを、旨くそれに付加するよう処置したものです」(五ノ一四一―六ノ一)は、「その中で注意すべきは、私は、至聖なる教父かつ司教であるカスバートについて、本書及び彼の伝記において記述したが、その一部は、リンディスファーン教会の修道士たちが彼についてかつて書いたものを発見し、読んだ史料をそのまま信じて採択したものである。また一部は、信用すべき人々の確実な証言によつて、私自身が直接知りえたことを慎重に附加したのである」とでも訳したらどうであろう。またベー

ダの歴史観の核心を示す有名な言葉は、「と申しますのは、広がっている言い伝えによつてわたしたちが収集しましたことを、明らかに次の世代の教訓になるようにわたしたちが文字で伝えようと努めたというのは、歴史の眞の法だからです」(六ノ三五)と訳されている。しかしこの文章から、歴史家の使命とは、事実の眞偽はともかく、一般に伝えられていることを子孫への教訓として書き残すことにある、という文意を読みとることは読者にとって容易でないように思われる。「わたしの心身の虚弱の故に、天の慈悲の前になるべく度々出ようとすることを忘れないでいただき度いのです」(六ノ七七八)は、「身も心も弱い私のために、彼らが神の御あわれみのとりにしをすることを忘れぬよう」という意味であろう。その先、「更にそれら個々の州についても……」(六ノ八一―)以下の文章は全く意味をとりかねる。それは、「そしてこの人々が、各々の教区で私の贈物へお返しをしてくれたらと思う。即ち私は、個々の教区やより有名な地方について、記録に値し、また住民にとつて有益と考えたことを勤めて書き記そうと心がけたのだから、そのお返しにすべての人々が敬虔なとりにしの祈りをしてくれたらと思う、」の意ではないであろうか。

訳文には訳者の好みも出るし、テキスト解釈も入り込む余地があるから、訳文がテキストと多少の距離をもつことも許されよう。しかし、かかる古典的著作においては、テキストの明瞭な読みちがえなきよう注意が肝要である。訳者はかなり短期間で訳了されたという。そのためか直訳というより誤訳と思われる箇所がかなりの数に

上るのは残念である。例えば序文のみをとりあげても、「以前に」(三ノ一)は「最近」であるし、「まずお読みいただきお役にたつように」(三ノ一―二)は「まず読んで認可して頂くため」である。「わたしは陛下のご熱心が全く衰えるを知らないことを申しているのです」(三ノ五)は「私はあなたの眞摯な御研究を十分尊重しております」である。「また歴史が悪人についての悪事を述べることであると致しますならば、正しい敬虔な聴き手でありまして、読み手でありまして、有害で歪んだことを避け、神に対し善且つ価値ありと考えることに、いつそう巧みに熱中することになりましょう」(三ノ七―九)は、「或は歴史が悪人の悪業を記録するとしても、信仰ある敬虔な聴き手や読者でありさえすれば、有害で邪悪なことをさげ、神のために善であり価値ありと考えたことに一層熱心に集中するであろう」である。「陛下ご自身最も注意深くお考えになり」(三ノ九)は、「このことをよく御存知の陛下」である。「いつそう広く闡明なさる必要があります」(三ノ一一)は、「一層ひろまることをお望みであります」である。「カンタベリ教会に職を与えられました」(四ノ五)は、「カンタベリ教会で教育を受けて」である。「カンタベリ州自体」は「カンタベリ大司教区」であろう。「これを私に伝達したのでした」(四ノ七―八)という箇所では、「そのうち記憶に値すると思われることを」という章句が脱落している。「このローマの聖なる教会関係の書翰を捜すこと」は「ローマ教皇庁記録保管所を捜すこと」である。「わたしたちが知るに値することを述べました」(四ノ一四)は、「私たちが(ここ

に)「えたことを学びました」である。「私がこの著作をものにする
ことができましたのは」(五ノ一)は、「私がこの仕事にあえて着
手するにいたつたのは」である。最後に「どんな地方でも教会での
活動があるということ」(四ノ一二―一三)は、「さまざまな地
方でのような教会の活動があるかということ」であろう。

こうした事情は以後の本文の訳述においてもくりかえされて、結
局この訳文をかなり難解なものにしていることは否定できない。そ
の二・三を指摘してみれば、「わたしたちは彼によつて、かの使徒
の説くところを明らかにすることができるようになつたからであ
る。また……」(九四ノ七一八)は、「したがつて我々は彼につい
て「かの使徒」という言葉を用いてもよい。というのは……」であ
ろう。「実際彼は世界に示そうと意図したと思われるその崇高性を
神の恩寵を与えることによつて、天上の威嚴の光輝の普遍の高揚へ
と向けたのであつた」(九五ノ一―二)は、「実際、彼は現世でもつ
ことを認められた高貴な地位を、豊かな神の恩寵により、栄光ある
天上の地位を求めたためにのみ用いたのであつた」の意であろう。
「肉体によつて抑制された場合にも」(九五ノ四―五)は、「肉体
に閉じこめられながらも」である。「けれども、今は羊飼の注意の
理由で、世俗の人間の苦難を蒙ることになり、自分の平穩の非常に
美しい光景の後に、地上の行為の塵によつて汚されています。そし
て多くの者の放縱のために自分を外的なものへ分離した時、内的な
ものを求める際にも疑いもなくこの劣つた者に立ち戻るのです。で
すからわたしは、自分が耐えていることをしつかり考え、自分が棄

てたことをしつかり考えています。失つたものを考えている間に、
わたしの所持するものはいつそうきびしいものとなるのです」(九
五ノ九―一三)は、「だが今では、私の靈魂は、司牧の配慮のため
に、世俗の人々との交渉を負うています。そしてそれは、かくも静
かな美しい観想の後にも、世俗的行為の塵によつて汚されてしま
うのです。多くの人々の墮落のために外的なものに精力を浪費して
いるので、内的なものを求める時にも、ごくわずかな部分がそこえも
どつていくにすぎません。このように私は、今がまんしているもの
と、かつて失つたものを思い較べています。そしてかつて失つたも
のを思いうかべる時、私が現在負っているものは、ますます重く感
じられるのです」とでも訳すべきではあるまいか。「修道士の職務
の遂行にあつても、彼は自分の修道院とすべく努めたからであ
る」(九五ノ一七)は、「教皇職につきながら、彼は自分の家を修道
院とすべく努めたからである」とすべきである。「大きな不分明に
蔽われていた祝福されたヨブの書を、神祕的解釈から説明するよう
にした。それは兄弟愛が多くの者に用いられるように鼓舞した作品
であるということ。彼は否定することはできなかった」(九六ノ
八一―一〇)は、「よくわからないことの多い福者ヨブの書を、比喩
的解釈で明かにした。即ち彼は、兄弟愛が多くの人に役立つよう自
らに課した仕事を拒むわけにはいかなかったのだ」の意であろう。
「心の豊かさに向かつて」(九八ノ八)は「多くの靈魂を救わんが
ために」であり、「ミサが彼らの身体を越えて行われるようにし
た」は、「ミサが彼らの遺体の上(使徒の墓地)で行われるように

した」とでも訳すべきである。「靈魂は星となり、掟は死を何ら損うことなく」(一〇〇ノ七)は、「靈魂は天上の栄光を求めえて、いかなる死の掟もはやそれを害することあらじ」である。「これは力であり、或は教えでありお前に注意をもたらし、またお前を羊飼たらしめ、お前が主にいつそう多くの群れを富として捧げるに至らしむ。かかる勝利により神の統治は喜び給うた」(一〇〇ノ七一—一〇一ノ一)は、「この労苦よ、この精励よ、この配慮よ、牧者なるあなたはこれを実行なさつた。主に多くの人の群を捧げんがために、そして今あなたは神の代理者とされこの勝利を喜んでおられる」とでも訳すべきであろう。「黙過されねばならない」(一〇一ノ四—五)は「黙過されてはならない」のである。「肉的恩寵」(一〇一ノ一二)は「内的恩寵」の誤植と思うが重要な箇所であるから指摘しておきたい。

なお文中、中世教会史関係の訳語で適切でないものがみうけられる。例えば Pontifex が明かに「教皇」を指して用いられているのに、「大司教」、「司教」、時には「修道士」とも訳されているし、primus cantator が「吟遊詩人」とか「大歌手」とか訳されているのは「聖歌先誦者」とでも訳すべきであろう。原註が全く自由に抄訳されている点にも問題があるが、巻末の解説では、ケオルフリッドに属すべき業績をベネディクト・ビスコップのものとして(四六二ノ一三—一四)。さらにベータの古典作家に対する態度の説明(四六三ノ六—八)を、その否定的面をのべた箇所だけで打ち切っている点などは特に訂正の要がある。確かに敬虔なキリス

ト教的作家であるベータだが、異教の古典をそれ自体として評価しなかったのは事実である。しかしまた彼が、護教のため、或は教理の理解を助けるために異教作家の利用価値を大いに認めていたことも確かであり、Plummer が原著巻頭の解説でのべようとした意図もむしろそこにあると考えられるからである。

以上、筆者はこの茫大な訳本の一部しか眼を通していないので、或はそのために起つた誤解から思わぬ失礼を重ねているかもしれない。また筆者は特にベータを専攻しているものでもない。しかし本書は中世キリスト教文化における貴重なる遺産であり、多くの人に親しまるべきものであるから、特に気付いた点を記し、改版の際、是非参考に供して頂きたいと願う次第である。

R. B. Brooke, Early Franciscan

Government from Elias to Bonaventure,

Cambridge, 1959, pp. 313

坂 口 昂 吉

本書は、フランシスコ会の創設期から一二六〇年ナルボンヌの総会にいたる修道会発展の概観をしたものである。従来の P. Sabatier の説によれば、エルトーナのエリアスという人物が、教皇庁と結んで始祖聖フランシスコの在世時代から権力をふるい、清貧の理想